

英語学点描

久保田 正人

本稿は、平成 18 年度言語教育センター公開講座「生徒がこんな質問をしてきたら」（平成 18 年 8 月 25 日、千葉県教育委員会後援）の内容の一部を項目別に文章化したものである。この講座は中学校・高等学校の英語科の先生方を対象としたもので、英語に関して、教える教員も教わる生徒も、だれでも一度は思いついたことのあると思われる疑問を取り上げて、英語学の視点から、できるだけ平易に、しかし原理的に、解説するという主旨の講座であった。

だれでも一度は思いついたことのある疑問というのは、いざそれを説明しようとする和一筋縄ではいかないものが多い。一筋縄ではいかないというのは、その多くがやさしいほうに誤解されているからである。たとえば当日も一つのエピソードとして紹介したことであるが(<http://f.chiba-u.jp/onlinelectures/grammar.html>)、an/a という不定冠詞の交替について、a apple のように母音が連続すると「発音しにくい」から、子音を入れて an apple と言う、というような説明が広く流布している。中には、「ここに挿入される子音がなぜ/n/なのか」と大まじめで考えている人もいるということであった。

これはけっして「重箱の隅をつつく」指摘ではない。*a apple という形が認められないことは、英語の発音、英語の歴史、英語表現の意味など、英語の根幹に関わる大きな原理に関係しているからである。英語の教員である以上、それを生徒にどう教えるかは別にして、こういう基本的な事実だけはぜひ知っておいてほしいという思いで公開講座を開いた。さいわいにして受講者からおおいに賛同を受けたので、ここに講座で取り上げたことを文章化することにした。

ただし、本稿で取り上げた項目の中には、別の拙稿ですでに取り上げたことのある項目や、その後の研究の進展により公開講座で述べた内容とは異なる内容となったものもある。本稿は、上記の公開講座の内容をふまえてはいるが、それを改訂したうえで縮約したものである。先生方には手軽に引ける項目別参考書として、オンライン講義と合わせてご利用いただければさいわいである。なお、項目によっては文章化した方がわかりやすいものと、図表を中心に据えた方がわかりやすいものがあるので、項目によって記述の粗密・長短にちがいがあ

(14)

1 なぜ冠詞は子音の前と母音の前で発音が変わるのか

発音が変わる究極の理由はわからない。が、変わり方の原理はわかっている。また、その原理は冠詞に特有のものではなく、いくつかの現象に共通したものである。

まず、冠詞の発音が変わるとき、たとえば不定冠詞の場合では、子音の前では a になり、母音の前では an になる、と言われている。

(1) an apple

a book

このことについて、「a apple のように母音が連続すると発音しにくいから /n/ を入れる」というような主旨の説明をする向きもある。

それは誤りである。まず、不定冠詞の本来の形は an であり、a ではない。a と an の関係は、a に n を足して an にするというのではなく、an から n を削除して a になるというのが正しい。また、「母音が連続すると発音しにくい」ということであるが、英語では母音の連続はなんでもない。India Apple Computers という表現では a apple と同じ母音の連続が生じている。つまり英語の母国語話者は母音の連続を「発音しにくい」などとは感じていないということである。

不定冠詞の交替現象は、英語における「語中音消失」の一例である。語中音消失というのは、ある音が、それを前後から挟んでいる別の音との関係で、消失する現象を指す。その際の条件は、概略、以下のとおりである。

(2) 英語における語中音消失

A x B

条件：A と B が類似音である場合、x は消えない

：A と B が類似音でない場合、x は消える

この場合、x とその前後の音との構造関係が、(x が A と組む) [Ax][B] であっても、(x が B と組む) [A][xB] であっても、かまわない。不定冠詞は x が A と組む [Ax][B] の構造関係である。

そこで不定冠詞の問題である。

(3) an apple an book

Ax B

Ax B

an apple の場合は、A と B がともに母音で類似音として分類されるので、それに挟まれた n にはなにも起こらず、そのまま保持される。一方、an book の場合は、A が母音で B が子音であるから類似音としては認定されず、n が消失し、その結果、a book という形が生ずる。

語中音消失は上記のように一定の環境に置かれることになった音について当てはまるものであり、類似音が隣接すること自体を禁止しているものではない。IndiaApple Computers の例でははじめから母音が隣接しているが、ここでなにかが問題になるということはないのである。

語中音消失は、不定冠詞の交替だけではなく、複数形語尾(-es)、三人称単数現在時制語尾(-es)、過去時制語尾(-ed)にも当てはまる。

(4) 複数形語尾(es)の例

lenses、senses、doges、bookes、monthes

英語における複数形語尾は-es([iz])である。-s([z])ではない。つまり、一定の環境で [i] が落ちて [z] になるか、そのまま [iz] が残るかである。

lens の場合は、語末の [z] を A とし、複数形語尾の [i] を x、[z] を B とすると、

(5) l e n s e s
A x B

となり、[z] と [z] が同一音であるから、[i] にはなにも起こらず、そのまま残る。

sense の場合は、現代英語では語末に黙字の e が付いているが、これは中期フランス語の sens を借用した後に付けたもので、この語の発音には関係がない。そうすると複数形語尾が付いた形で考えてみると、

(6) s e n s e s
A x B

となり、[i] が [s] と [z] に挟まれることになり、そのまま残る。この場合、[s] と [z] では有声・無声の別があるが、同じ調音点で同じ調音様式の音であれば、有声・無声の区別は語中音消失現象ではカウントされないようである。

doges や bookes の場合は、doges にあっては [g] と [z] が、bookes にあっては [k] と [z] が、それぞれ類似音ではないので、間に挟まった [i] が消える。その結果、末尾に子音が重なる発音となり、dogs や books とつづられるようになる。books の s は [k] に同化して無声音 [s] となる。

monthes の場合は、次のように

(16)

(7) m o n th e s

A x B

[θiz]

↓

[θz]

↓

[θs]

となり、末尾に[θiz]という音の連続が現れる。この場合、[θ]と[z]は調音点が異なるから類似音とは認定されず、[i]が消失して[θz]となり、[z]が[θ]の無声性に同化されて[s]になる。つまり[θs]という形である。この場合、[θ]は舌歯音で[s]は硬口蓋音とまるで違う音であるにもかかわらず、monthesの語尾を[-θiz]と発音している生徒が少なくないようである。このあたりの発音はしっかり教えないといけない。

なお、繰り返しになるが、類似音の連続自体は英語ではまったく問題にならない。たとえば次の文の下線部には[z]が連続して現れるが、

(8) She does not love a man who is zealous for nothing.

語の境界線を挟んで同じ音が連続する場合の通例にしたがって[z:]と長音化される以外、なんの問題も生じない。

次に三人称単数現在時制語尾(es)の例を取り上げる。

(9) arises、addresses、walkes、runes、states

三人称単数現在時制語尾は-es([iz])であり、-s([z])ではない。arisesやaddressesのように語末の発音が[z/s-i-z]となる場合、[z/s]と[z]は類似音であるから、[i]が残って[z/siz]となる。一方、walkes/runes/statesの場合は、それぞれの語末の発音が[kiz]/[niz]/[tiz]となり、[i]を挟んだ音が類似音ではないから、[i]が消失し、[kz]（同化により[ks]）、[nz]、[tz]（同化により[ts]）となる。

過去時制語尾(ed)の発音にも語中音消失が関わっている。

(10) faded、attached、stated、walked、breathed

過去時制語尾は-ed([id])であり、-d([d])ではない。faded/stated/walked/breathedのような例は規則通りに変化する。問題になるかもしれないのはattachedである。この語の末尾の発音は[-tʃid]となる。この場合、最後尾の[d]と組み合う音は破擦音の前半の[t]の部分ではなく後半の[ʃ]の部分である。語中音消失で問題になるのはxの直前直後にある

A と B である。そうすると [ʃ] と [d] は破擦音と破裂音で異なる子音であるから、[i] が消失して [ʃd] となり、最終的に [ʃ] の無声性に同化されて [d] が [t] となって、[-tʃ t] となる。うっかり、[-tʃit] と母音を入れがちになるから注意を要する。

次に定冠詞の発音の交替について考えてみよう。が、その前に、冠詞の基本的な発音を確認しておこう。

(11) 冠詞の基本的な発音

- ・不定冠詞 an [an] 弱形 a [ə]
- ・定冠詞 the [ði:] 弱形 [ðə]

不定冠詞の基本形は an であるからそのままの発音が基本であり、[ə] が弱形である。定冠詞は the であるが、e という文字は、それ自体が発音を担う場合は、どの位置に置かれても一律に [e] と発音されるものであった。それが大母音推移によって、アクセントの置かれる位置あるいは語末に置かれた場合は [i:] と発音されるようになった。したがって the は単独では [ði:] と読むのが基本である。[ðə] は弱形である。

ここで、二つの冠詞の弱形に共通点があることが注目される。どちらも語末に「シュワー」(schwa) と呼ばれるあいまい母音 [ə] があるのである。この [ə] は必ず短く発音されるもので、決して長母音にならないところに一つの特徴がある。

英語の短母音は、連続して現れることを嫌う強い傾向がある。たとえば次の文を見てみよう。

(12) a. You are a teacher, aren' t you?

[ə][ə] → [ərə]

b. There is a book on the desk.

[ðə][əz] → [ðərəz]

are という動詞は特に強調して読まないかぎり [ə] と発音される。そして a という不定冠詞も [ə] である。これを放置すると [ə][ə] と短母音が連続することになる。また there is 構文における主語の there は、弱形の定冠詞とまったく同じ発音である。つまり [ðə] である。ところが直後の is も、ふつうに読めば [əz] であるから、ここにも [ðə][əz] と短母音の連続が現れることになる。

どうして、英語では短母音の連続が嫌われるかということ、短母音を続けて発音しようとすると、どうしてもその間に声門閉鎖音 [ʔ] が入るからである。短く「アッア」と発音するときの「ッ」である。声門閉鎖音は英語では用いられない。だから [ə][ə] という短母音の連続は英語では嫌われるのである。

これを避ける方法は以下の二つである。

(18)

(13) a. 短母音が連続しないようにする

- i. 子音の挿入
- ii. 消去可能な母音を消去

b. 先行母音を長めに発音する

[ði]を長めに発音する

まず、間に子音を挿入することで短母音の連続を断ち切る方法がある。ただし、どんな子音でもよいというわけではなく、当該の語にはじめから備わっている子音だけが許される。are であれば[r]である。これを間に挿入すれば、[ərə]となる。同様に、there is/are の場合も、there の[r]を意図的に復活させて[ðerəz]/ [ðerə]とすることによって短母音の連続を避けるのである。中学校でこの構文の発音を教えるさいに、[r]を意識させながら「ゼリズ」「ゼラ」と教えることがあるのは、このためである。

また、どちらかの短母音を消すことが可能な場合はそれを消すという手段で短母音の連続を避けることもできる。そのあらわれが口語体における be 動詞の縮約形 (there' s/there' re)である。

もう一つ、どちらかの母音を長めに発音するという方策もある。この場合、実際に長めに発音されるのは先行するほうの母音である。そのあらわれが母音が直後にひかえている場合の定冠詞の発音である。たとえば the apple はそのまま読めば [ði][æpl] であるが、[ði] の [i] を長めに発音することによって短母音の連続を避けることができる。定冠詞を [ði] と読むときは [i] を長めにのばして発音するのが英語らしい発音となる。この点の指導も肝要である。

2 horse は複数形になっても語尾が濁らないのに、どうして house の場合は濁るのか

英語の土着語 (1, 100年ごろ以前より英語に存在していた語) では、語末の [s]、[f]、[θ] は、母音 (綴り字ではなく実際の音としての母音) に挟まれた場合に有声化して、それぞれ [z]、[v]、[ð] と発音されていた。以下の語の末尾音の交替はこの規則的な音交代の名残である。

(1) half - halves

south - southern

breath - breatheth

wife - wives (cf. wife' s)

house - houses

houses の場合も、末尾が[-usiz]となり、[s]が[u]と[i]に挟まれているから、自動的に[-uziz]となった。つまり house に複数形語尾がつくと有声化するのとは規則的な変化だったわけである。

それにたいして、以下の語などは複数形語尾がついても有声化しない。

(2) horses devices senses

horses や senses は語末の[s]の右側には母音があるが、左側にはない（左側にあるのは子音の[r]や[n]である）。したがって、有声化が生じないのは自然なことである。

が、devices はどう考えたらよいであろうか。結論から言えば、device という語は英語の土着語ではなく、15 世紀にフランス語から借用されたものである、という点に鍵がある。

語末の[s]、[f]、[θ]が母音に挟まれて有声化するのは、1,100 年ごろまでに英語に存在していた語にのみ起こる古期英語の特徴であった。それ以降に登場した語にはこの規則性は適用されない。現代英語における頻度から言えば、語末の[s][f][θ]が有声化しない語の方が圧倒的に多いから、あたかも有声化する houses の方が不規則的に感じられるけれども、それは英語に新参の外来語が多いということの反映であるにすぎない。

ちなみに所有格形の wife' s については、末尾の[f]の左側には母音があるものの、右側には母音がないから、[v]にはならず、そのまま[-fs]と発音される。

3 過去時制と仮定法はどうして同じ形なのか

英語における過去時制は現在時（発話の時点）とつながらない過去の時を表すことを基本とする。現在時とつながる過去の出来事を表す場合は現在完了形が用いられる。たとえば、つい 10 分前に起きた出来事でも、それが現在（発話の時点）と結びついていないと話し手が考える場合は過去時制が用いられる。100 年前に起きた出来事でも、それがなんらかの点で現在（発話の時点）と結びついていると考えられる場合は現在完了形が用いられる。

そこで、過去時制と仮定法の関係であるが、過去時制は現在と結びつかないものとされているから、現在時のあり方である「現実」とも結びつかないという方向に解釈が派生する。この「非現実」のあり方を表したのが仮定法である。過去時制と仮定法が基本的に同じ形をとるのも、概念上、この二つは「現在（のあり方）と結びつかない」という点で同じものだからである。

4 まだ寝ていないのにどうして It' s time you went to bed. と言うのか

(20)

この went は仮定法の用法と考えるよりは、むしろ過去形の用法のものと考えるほうが適切であるように思われる。なぜであるかという、この文の主旨は、発話の時点で「眠ることが実現していた（はずなのに、あなたはまだ起きている）」という内容を表すからである。催促の表現。

5 前置詞の to と不定詞の to は同じものか

同じものである。目的語が名詞であるか動詞であるかで名称をちがえているだけである。to の原義は「～の方向へ」であって、出発してから目的地に到着するまでに時間がかかることを表す。

たとえば次のような用例がその典型的なものである。

- (1) a. I went to Tokyo yesterday. (東京に着くまでに時間がかかっている)
b. I want to leave here. (出発するのはこれからだから、発話時の今と出発時に時間差がある)

ただし「出発」はするものの「到着」するか（したか）どうかは、通例、文脈を見なければわからない。

- (2) I wanted to leave there. (実際に出て行ったかどうかはこの文だけではわからない)。

次の文も参照。

- (3) a. I stopped to smoke. (この文の正確な解釈については **stop** の項を参照)
b. I stopped and smoked.

to smoke とあればこの文だけからではたばこを吸ったかどうか不明であり、smoked とあれば吸ったことになる。

to の有無と関連して、不定詞と動名詞を比べておくことにしよう。

- (4) a. I like to swim.
b. I like swimming.

不定詞を用いた文は、まだ泳いでいないという状況で、「泳ぎたいなあ」と述べている文である。動名詞を用いた文は、すでに泳いでいる（あるいは泳ぎ終わった）というような

状況で「水泳はいいなあ」と述べている文である。したがって、動名詞を用いた文の主語の水着は濡れており、不定詞を用いた文の主語の水着は濡れていないことになる。またふだんから水泳に親しんでいる場合は動名詞を用いるのがふつうである。

不定詞と動名詞の対比は過去時制の否定文においてより鮮明になる。次の文を参照。

- (5) a. I did not like to kill him.
b. I did not like killing him.

不定詞文の場合は、「あの男を殺したくなかった」というだけで、実際に殺害したかどうかかわからない。ところが動名詞文の場合は、殺害は実行済みであり、not は killing him にはかからない。not がかかるのは like である。つまり、「好き好んであの男を殺したわけではない」の意となる。

to の出沒といえ、二重目的語構文も関連してくる。次の文を見てみることにしよう。

- (6) a. John taught English to us.
b. John taught us English.

英語には本来(6a)のような前置詞を用いた構文はなく、(6b)のような二重目的語構文だけがあつた。それが、後年、フランス語の影響を受けて、(6a)のような前置詞構文が生まれた。その点で(6a)のような前置詞構文はやや特殊な位置づけにあり、現在でも、外来語の動詞や、やや込み入った文脈でしか用いられない。

そこで(6)の文の意味解釈であるが、(6a)は to がある分、教えた内容が教わった側に届いているかどうか不明である。通例、この文は、「ジョンはわたしたちの英語の先生でした」という内容にとどまる。それにたいして、(6b)の文は、「ジョンのおかげでわたしたちは英語ができるようになりました」というところまで意味する。

このように、to があると、目標に達したかどうかかわからないという不透明な内容になる傾向にある。次の文も同様の対立がある。

- (7) a. I wrote to him last week(, but I destroyed it).
b. I wrote him last week(*, but I destroyed it).

(7a)の文は「先週、彼に宛てて手紙を書いた」というだけで、投函したかどうか不明である。そのため「思い直してその手紙をやぶいた」という内容の文を後続させることができる。それにたいして、(7b)の文は、to がない分、宛先に指定された人物に手紙が届いたというところまで意味し、したがって「思い直してその手紙をやぶいた」という内容の文を続けることができない。

この意味のちがいに対応して、(7a)の文は手紙を書いたのが先週であることのみを表す

(22)

が、(7b)の文は、手紙を書き、投函し、それが相手に届いたという一連の出来事が先週一週間のうちに起きたことを表す。

to の出沒に関係したもう一つの事例を検討しよう。使役動詞や知覚動詞の例である。

- (8) a. I made him go.
b. I saw him cross the street.

使役動詞や知覚動詞を能動態で用いた場合、補文の動詞には通例 to がつかない。それはなぜであるかという点、これらの動詞は、通例、主節の行為の実現と補文の内容の実現が同時に成り立っている（あるいは同時に成り立つことが約束されている）ことを表すからである。したがって(8a)の文のように「彼を行かせた」「彼に行ってもらった」という場合、概念上は、働きかけをしたと同時に、彼の行動が実現したことを表すということになる。また(8b)の文のように「道路を渡（り終わ）るのを見た」という場合も「見た」時点において he crossed the street. が成り立っている。したがって二つの出来事が時間差なく実現しているものと解釈される。

ところが、使役動詞の構文にも to が生ずる場合がある。

- (9) a. I got him (be) angry.
b. I got him to be angry.

(9a)の文は「彼はわたしの言動に腹を立てた」の意であり、わたしの言動の発生と同時に he was angry. という事態が成立しているものと解釈される。ところが、(9b)の文はやや異質である。この文は「わたしは彼に腹を立ててもらった」というくらいの意である。つまり、わたしの言動に彼が腹を立てたというのではなく、依頼をして腹を立ててもらったという時間差のある二つの行動を表している。ここまで来ると、(9b)の got の用法は「使役動詞」というより、ask などと同じ部類の動詞として分類した方がよいかもしれない。

使役動詞の場合は二つの出来事間に時間差があっても、その性質上特に問題はないが、知覚動詞の場合は問題が生ずる。

- (10) a. The tune was heard to come from the top of the hill.
b. *I heard the tune come from the top of the hill.

(10a)の文は文法的には問題がない。ところが、これに対応すると考えられる(10b)の能動態は英語として成り立たない。どうして(10b)の能動態が成り立たないかというと、聞こえるのは音であって、その音源の方向が聞こえるわけではないからである。音源の方向は音を聞いた後の判断によって推測・確定するのであり、音の知覚と音源の方向の判断は時間差のある出来事である。そうすると、そのような時間差のある出来事を to のない構文で

表すことはできないことになる。

このように、to 付き不定詞の知覚構文では、to 付き不定詞の内容は、話し手が直接に見聞きしたものではなく、推測による判断を表しているものであることに留意する必要がある。

6 不定詞は未来のことを表し、動名詞は過去のことを表すと教わったが、It's nice to meet you. は目の前で会っている人に使うのではないのか

「不定詞は未来のことを表し、動名詞は過去のことを表す」という主旨の説明は基本的に正しい。もちろん不定詞自体が未来のことを表すのではなく、to の存在が「未来」を指向する意味の柱になっているのである (to の項を参照)。

そこで表題の文であるが、この文は相手に会ったときの挨拶として用いられるものであるから、対面自体はすでに実現していることになる。そういうところになぜ to が生ずるかが問題である。

表題の文と類似の表現として次のような文も挙げられる。

(1) I am glad to meet you.

to 付き不定詞を用いた挨拶文は、事前に面会の約束があつて、それが実現したときに用いられるものである。偶然会った相手にたいして用いることはできない。ここに to の登場する理由がある。つまり、面会は約束時から見て先のことであり、事前の約束時とその約束が実現する時との間に時間差がある。その時間差を現在に平行移動した慣用表現が表題の文である。このような文は、お会いするのが待ち遠しかったという意味合いを伝えることにも貢献している。

これにたいして、次のような動名詞を用いた文も存在する。

(2) It's nice meeting you.

この文は、対面時の挨拶ではなく、別れの挨拶として用いられる。その場合、事前の約束のある面会であったかどうかは問題にならない。偶然会った人にたいしても、用いられる。

7 play the piano には冠詞が付くのに、どうして play baseball には付かないのか

定冠詞は次の 2 つの条件を満たすと自動的に付加される要素である。

(24)

(1) 条件1 範囲を限定している

条件2 その範囲の中で、該当するものが一つ（一組）だけある

たとえば次の(2)のような表現では常に定冠詞が付く。

(2) a. the summit of a mountain.

b. This lake is the deepest in the world.

(2a)の場合、一つの山の中で(条件1)、頂上(summit)に該当するところは一箇所(条件2)であるから、summitには自動的にtheが付く。(2b)の場合は、この湖は、世界で(条件1)、もっとも深い(条件2)というのだから、自動的にtheが付く。

同様に、Johnという固有名詞で表される人物を指してthe boyという場合、そこで問題になっている文脈の中で(条件1)、boyに該当するのがJohn以外にいない(条件2)ことが求められる。もし同じ文脈の中でJohn以外にもboyに該当する人物が登場している場合は、the boyという表現は用いられない。ただし複数の少年を一括してthe boysという表現で表すのは可能である。その場合は、該当する少年たち全員を指し示すことになる。A、B、Cの3人の少年が登場している場合、たとえばCを除外して、AとBだけを指してthe boysという表現を用いることはできない。複数形に定冠詞を付ける場合は「一括」が条件である。それが条件2の「一組」の意味である。

ところが(1)の二つの条件を一見満たしているようでいて、定冠詞が登場しない例がある。次の文を見てみることにしよう。

(3) This lake is deepest at this point. (この湖はここが一番深い)

この場合、この湖(条件1)で、もっとも深いところ(条件2)は、ここだ、と言っているのであるから、定められた枠の中で、該当するものが一つあることになり、定冠詞が生ずることが予想されるのだが、定冠詞は生じない。

既出(2b)と(3)のちがいを求めてみると、(2b)の場合は「この湖」を世界の他の湖と比べており、明らかに「世界の湖の中で」という「範囲の限定」が行われている。それにたいして、(3)の文の場合は、「～の中で」という範囲の限定が表現上行われていない。主語のthis lake 自体で「範囲の限定」が行われているようにも見えるが、そうではない。次の例文と比べてみよう。

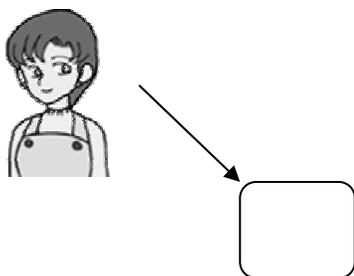
(4) This point is the deepest in this lake.

この場合ならば、「この湖の中で」と明確に範囲の限定が行われている。これと同じ意味

での「範囲の限定」が(3)の文にはないのである。

なにかの範囲を限定するということは、(たとえ物理的に話者がその範囲の中に入れても)思考の視点はその範囲の外にあって、全体を鳥瞰しているというようになっているように思われる。それにたいして(3)の場合は、むしろ、問題にすべき範囲がすでに限定済みで、思考の視点はその範囲の内側に入り込んでいるといえる。いわば、外在的な視点と内在的な視点のちがいである。これを図示すれば次の(5)のようになる。

(5) a. 外在的な視点



b. 内在的な視点



定冠詞が生ずるのは「外在的な視点」が存在している場合である。

ここで表題の2つの文を考えてみよう。

(6) a. to play the piano

b. to play baseball

(6a)の場合、演奏者とピアノは別々の存在である。演奏者がいなくともピアノは存在し、ピアノがなくとも演奏者は存在する、その点で、ピアノと演奏者の関係は相互に外在的である。それにたいして、(6b)の場合は、playの主語がbaseballという競技をつくっており、競技者がいなければ野球のゲームそのものが存在しえない。その点で競技者と野球とは一体化している。競技者は内在的な視点から野球を見るしかないのである。

同様の例をさらに挙げてみよう。

(7) a. We enjoyed diving.

b. We enjoyed the diving.

(26)

(7a)の場合は主語がダイビングをしたのであり、(7b)の場合は他の人のダイビングを主語が眺めていたことを表す。

さらに、次のような例を見てみよう。

- (8) a. the mother of a family
b. Mother

「母親」は一つの家族に一人しかいないから、(8a)のように一般論として言及する場合は定冠詞を伴う。ところが、(8b)のように定冠詞を伴わない場合は、通例、話し手自身の母親を指す。(8b)では mother が大文字で始まっており、これが固有名詞に近い扱いを受けていることを示している。が、大文字であることは音声的にはなんの意味もなく、むしろ冠詞を伴っていないという点にこそ意味がある。ある範囲の中に一つしかないことがわかっている概念に関して定冠詞が共起しないのは、そこに内在的な視点が存在しているからである。母親に関しては、それが自分の母親であることにつながるのである。

以上、やや込み入った議論を大急ぎでしてきたが、こんな面倒くさい議論をするよりも、定冠詞を伴うのは名詞があるからであり、定冠詞を伴わないのは名詞がないからである、といえれば済むではないかという見方もありうる。

次の(9)の文を見てみることにしよう。

- (9) a. This lake is the deepest (lake) in the world.
b. This lake is deepest (*lake/*point) at this point.

たしかに、形式の上では、(9a)のように名詞を補うことができる場合は定冠詞を伴い、(9b)のように名詞を補うことができない場合は定冠詞を伴わない。しかし、定冠詞の有無が名詞の存在と本質的なかわりがあるわけではないということは、既出(6)、(7)、(8)の諸例からすでに明らかである。これらの例では名詞が問題になっているが、それにもかかわらず、定冠詞を伴う場合と伴わない場合があるのである。

ただ、名詞の有無と定冠詞の有無を関連づける見解は意外に広く流布しているようである。そこでこのような見解に重大な欠陥があることを指摘しておくことにしよう。

次の(10)の例文を見てみることにしよう。

- (10) a. John is the ugliest man on campus.
b. John is ugliest man on campus.

この二つの例文は最上級に名詞(man)が付随している。名詞があるから定冠詞も生ずるといっているのであれば、(10b)は英語の最上級として成り立たないことになる。しかし事実是这样になっていない。(10b)は英語として立派に成立する。

(10a)も(10b)も、ジョンなる男性が学内一の醜男として位置づけられているものである。それならば同じ意味かという、そうではない。(10a)の文はジョンにたいする悪口である。それにたいして、(10b)の文はジョンが「学内醜男コンテスト」の優勝者として位置づけられていることを表している。定冠詞を伴う(10a)の文は、ジョンと、学内最悪の醜男という概念との結びつきが偶然的・外在的で、(10b)の文は、コンテストにただ一つ内在する「優勝者」という地位を表している。誰が優勝しようと「優勝者」という地位それ自体はコンテストに本来的に内在しているものである。

要するに、定冠詞を用いる条件を満たしているように見えていながら、定冠詞（どころか一切の冠詞）が生じていない例は、当該範囲と対象概念とのあいだに内在的なつながりがあるとわかっている場合である。定冠詞を用いるというのは、そうしなければ限定不足であるからであり、すでに十分に限定済みの概念には、もはや定冠詞によるさらなる限定は不要であるということである。

8 ALTの先生がprincessという単語を発音すると、ceの部分が「セ」ではなく「ツェ」と聞こえる（プリンツェスと聞こえる）が、それはなぜか（高校生の質問）

英語の n には発音が二つある。[n]と[ŋ]である。[n]は歯茎音で、いかなる場合でも舌尖を歯茎にしっかりつけて発音する。日本語で「なにぬねの」と発音すると、舌尖が歯茎にべったりとつくが、英語の[n]は接触面積を小さくして舌の尖端だけをつける。一方、[ŋ]は軟口蓋音で、舌尖は浮いている。これは英語にとって重要な発音上の区別であるにもかかわらず、日本人学習者の中にはまったく区別していない人たちが少なくない。

そこで表題のprincessの発音であるが、語中に-nがある。このnの発音は歯茎音の[n]である。この[n]の直後に[s]がある。ここが問題である。

[n]と[s]は調音点と同じ歯茎音であり、[n]は閉鎖音、[s]は摩擦音である。[ns]をすばやく発音すると、舌尖を歯茎につけた閉鎖の状態から一気に[s]の開放状態へ推移することになり、軽い破裂が起きる。この破裂は調音点と同じ[t]の破裂とよく似ているために、発音辞典によっては上付きの t を入れて[n's]と表記するものもある（cf. *English Pronunciation Dictionary*, Cambridge University Press）。つまり[ns]の後半部は[ts]に似た音となる。それゆえに、princess を自然な速度で発音すると-nce-の部分は[ntse]に近い音となり、ceの部分が「ツェ」と聞こえるのである。

その他に注意すべき語の代表例をいくつか挙げておこう。下線部の n はすべて[n]であり、[ŋ]ではない。

pencil（「ペンツェル」に近い）

principal（「プリンツィポル」に近い）

(28)

principle (「プリンツィポル」に近い)

sense (「センツ」に近い)

なお、[n]の直後の音が[ʃ]でも同じ現象が生ずる。次の例を見てみることにしよう。

championship

この語の場合、後半部の発音は[rʃip]であるが、[n]から[ʃ]へ移る際に軽い破裂が生じ、[nʃip]となる。つまり当該部分は[tʃ]に近い破裂である。そのため「チャンピオンチップ」のように聞こえるのである。ちなみに、カタカナで「チャンピオンシップ」と表記した場合と「チャンピオンチップ」と表記した場合の「ン」の発音に注意せられたい。

9 なぜ、be 動詞だけが、be, been, am, is, are, was, were と七つも変化形があるのか

現代英語の動詞の基本変化形は、現在形、過去形、過去分詞形の三つであるが、これは英語の歴史において屈折変化が衰退した結果であり、古期英語では以下に示す九つの変化形があった。

古期英語の動詞の変化形

(a) 現在形

一人称単数形

一人称複数形

二人称単数形

二人称複数形

三人称単数形

三人称複数形

(b) 過去形

単数形

複数形

(c) 過去分詞形

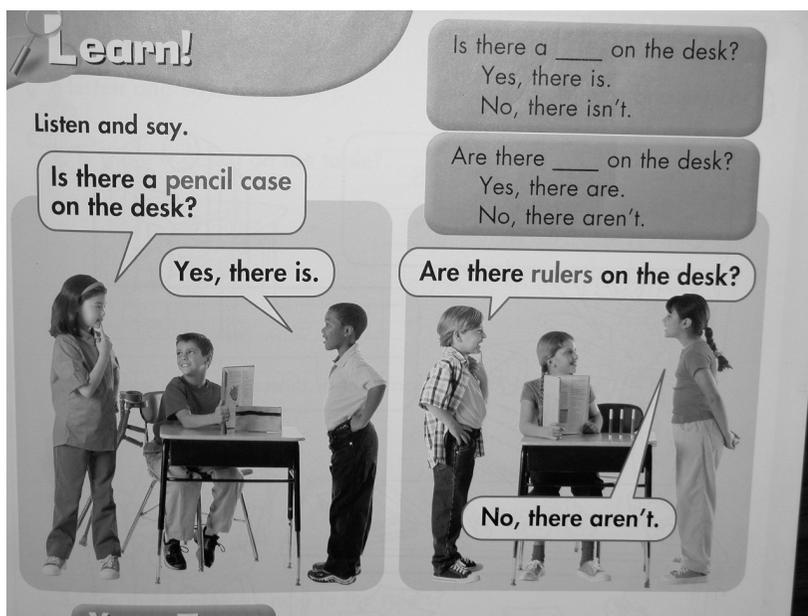
現代英語における be 動詞の変化形は形態上の整合性がないが、これは、どうしてそのようになったか理由はわからないが、三種類の別々の動詞の寄せ集めだからである。

現在形 (es-を語根とする 'exist' の意の動詞)

am
is
are (語源不明)
過去形 (wes-を語根とする 'remain' の意の動詞)
was
were
分詞形 (beu-を語根とする 'become' の意の動詞)
be
been

10 there is 構文の解説に付されている絵で、質問する人と答える人の間についてがあるのはなぜか

この質問は以下の絵を見た方から寄せられたものである。



Eisele, Beat, Catherine Yang Eisele, Rebecca York Hanlon, Stephen M. Hanlon, and Barbara Hojel (2004) *Hip Hip Hooray! 2*, Pearson Education, Inc, New York.(p.43)

there is 構文は、あるものの存在が (話し手には見えていても) 聞き手には見えていない場合に用いられるものである。次の(1)の文を見てみることにしよう。

(30)

- (1) a. There is a book on the desk.
b. *As you can see, there is a book on the desk.
c. There is no one in the room.

(1a)の文は、「机の上に本がありますよ」と、その状況が見えない聞き手に報告している文である。聞き手に見えない状況であることは、(1b)の文のように、as you can see（ごらんのとおり）という文を加えると文全体が解釈不能になることからわかる。また、there is 構文は(1c)の文の場合のように否定文で用いられることが多いが、それは「だれもいない」ということは、人の存在が「見えない」からである。

聞き手にも見える状況を表す場合は、次の(2a)のように、場所を表す表現を直接主語に据えた構文を用いる。

- (2) a. On the desk is a book.
b. As you can see, over the desk is a book.
c. *Probably, on the desk is a book.
d. *In the room is no one.

この構文が聞き手にも見える状況を表すものであることは、(2c)のように、命題の実現度の査定（つまり確率判断）を表す表現と共起しないことからわかる。確率判断は推測を含むことを表明するものであるから、現に見えているものごとには適用されないのである。また、「だれかがいる」というのであれば直視できるが、(2d)の文のように「だれもいない」というのでは直視する対象が存在しない。場所表現を主語に据えた構文は「無の状況」を表す場合には用いられないのである。

(1)の there is 構文と(2)の場所主語構文の基本的なちがいを次の(3)の文で確認しておくことにしよう。

- (3) In my right hand is a pencil, and in my left there' s an eraser.

この文は、前半は話し手が右手を差し出して、「ごらんのようにわたしの手には鉛筆がありますね」と聞き手に見せている姿を表しており、後半の文は話し手が左手を背中にまわして聞き手に見えないようにして、「じつは左手には消しゴムがあるんです」と報告している姿を表している。

11 A whale is no more a fish than a horse is. という文で、than 以下で省略されているところを補うと a horse is a fish になるが、どうしてこの肯定文を「馬は魚でない」と否定文で訳せるのか

たしかにこの文における a horse is は a horse is a fish の省略形である。この部分は肯定文であって、否定文ではない。その証拠に、否定文の省略形であるならば必ず否定辞が残るはずであるからである。a horse is not a fish という文の省略形は a horse is not であって a horse is (という肯定形で終わる形) ではない。したがって than 以下の文は肯定文であることになる。つまり「馬は魚だ」である。

また、前半の a whale is no more a fish という文も否定文ではない。なぜならば、no という否定辞は冠詞付きの名詞とは共起しないからである。He is no a doctor という文は英語には存在しない。それと同じく、a whale is no a fish という文も英語では認められない。つまり前半部における no は前半の文を否定しているのではないということである。

そうすると、表題の文は前半も後半も肯定文であることになる。つまり、「鯨は魚である」と「馬は魚である」である。この段階では、「鯨は魚でない」とか「馬は魚でない」などという解釈は生じない。

no more than という表現は、通例、than 以下にネガティブな内容が置かれる。たとえば数字が置かれた場合は「たったこれだけ」というほどの意が表される。数字が命題に替わった場合は、現実の世界ではありそうにない、常識はずれのことながら置かれる。

そして no more than B というのは、直訳すれば「Bを超えることはない」ということであるから、「せいぜいB程度である」というくらいの意味になる。ここでBというのは、上述のとおり、「現実の世界ではありそうにない、常識はずれのことながら」であるから、この構文は、主節の内容を「常識はずれの発言と五十歩百歩だ」と貶めていることになる。

この構文では主節に文脈上すでに言及されている既知の内容が置かれる。それはどういう内容かというと、相手の発言を引用している場合が多い。「きみはこういうことを言ったね」というくらいである。その発言を「常識はずれ」の発言と比べて、いい勝負だと言っているのである。

以上のことを勘案して表題の文を検討してみよう。

(1) A whale is no more a fish than a horse is.

この文は、論理構造として、主節と従属節の各肯定文を more than という不等式で結び、その不等式を否定するという形になっている。簡略化した論理式で表すと、概略、次の(2)のようになるであろう。

(2) ~ [[a whale is a fish] > [a horse is a fish]]

(32)

「鯨が魚である度合いと、馬が魚である度合いを比べて、前者の方が事実としての度合いが大きい、ということはない」というくらいの意である。つまり、たいしたちがいはない、五十歩百歩だというのである。「馬が魚である」わけではなく、そんなことはだれでもばかげていると思う。「鯨は魚だ」というあなたの発言は、「馬は魚だ」という発言と兄たり難く弟たり難し。もし鯨が魚なら、馬も魚になってしまうではありませんか、という主旨である。

この構文は、than 以下に、意表を突く、しかし、だれでもすぐにばかげているとわかる内容を持ってくるところに、いわば「爆弾」が仕掛けてあるのである。話し手の心の中では、「鯨は魚ではない」と思っているのだが、そして、そのことを聞き手に悟らせたいのだが、それでは、いきなり相手の発言を否定することになり、おもしろくない。この文は、あなたの発言は「馬は魚だ」と言っているも同然だと、人を驚かせるような内容をあえてぶつけてくるところに、その真骨頂がある。

ちなみに、この構文を正しく解釈している英和辞典は富山房の『大英和辞典』（絶版）のみである。そこには次の(3)の例文と訳文が挙げられている。

(3) He can no more do it than he can fly. (あの男にそれができるくらいなら空だって飛べるはずだ)

さすがと言うしかない。

12 I did not find anything. と I found nothing. はどう違うのか

否定辞の作用域は、通例、否定辞の右側である。表題の二つの例文についていえば、概略、次のような作用域となる。

(1) I did not [find anything]

(2) I found [nothing]

(1)の文の構造における not の標的は、括弧内のいずれの要素でもよい。つまり、[find]、[find anything]、[anything]のいずれでもよい。find を含む要素が標的になる場合は、探すという行為そのものが否定されるから、探さなかったという意になる。anything が標的ならば、「探したが、(AもBもCも) いかなるものも見つからなかった」の意となる。

それにたいして、(2)の文の構造における no の標的は、thingのみである。find (found) は否定されない。つまり、探すという行為は実行したことになる。「見つけた」ものの事物

の集合が no (つまり、空) であるということであるから、「探したがなにも見つからなかった」の意となる。

そうすると上記二つの文は解釈が重なるところと重ならないところがあることになる。重なる解釈は、「探したがなにも見つからなかった」というものである。

一般に、解釈に共通するところのある二つの構造が存在する場合、その共通の解釈をどちらの構造で表すかという、特に指定されているのでないかぎり、複雑でない構造の方が優先して用いられる傾向にある。(1)の文は三通りの解釈が可能な複雑な構造であり、(2)は解釈が一つだけであるから、「探した」という文脈で優先的に用いられるのは(2)の形の方であることになる。(1)や(2)の文の使い分けについて教授する場合、文脈の情報について言及することが必要である。

13 歩いていなくても | stopped to smoke. は「立ち止まってたばこを吸った」か

この文に関する誤解は、日本の英語教育界に深く浸透している。「立ち止まってたばこを吸った」といういかがわしい解釈がどこから出てきたか不明だが、それを引用、孫引きする英和辞典が後を絶たない。

stop という動詞が目的語をとらない形で用いられている例をよく見てみると、いずれも「それまでしていたことをやめる」の意であることがわかる。つまり、この形の文があらわれる前に、同じ主語がなにかの行為をしていたという内容が必ず存在しているのである。次の例を見てみよう。

(1) Why and how do chameleons change their colors? asks Mellisa Wong, a student in Manhattan. Imagine your mother, calling you to come in for lunch on a cool fall afternoon. You are playing in a pile of leaves – red, gold, green and brown scraps of color, crackling and shifting. You don't want to stop. As your annoyed mother comes into the backyard to look for you, you relax and sink into the leaves. You idly watch as the skin on your hands and arms begins to quickly change color, from its normal flesh tone to mottled red, gold, green and brown. As you lie quietly, perfectly matching the leaves, your mother passes nearby, muttering to herself. "When I find him..." -- *Los Angeles Times*.

この文章は Los Angeles Times の、いわば「子ども相談室」ともいえるコラムに掲載されたものである。メリサ・ワンという男の子が「カメレオンはどうして体の色を変えるのですか」と質問し、回答者が身近な例を持ち出して解説しているものである。「たとえば」と解説者。「気持ちのいい秋の日の午後、落ち葉に埋もれて遊んでいるときに、お母さんが

(34)

『お昼ご飯ですよ』と呼びに来たら」と切り出して、続けて、*You don't want to stop.* と言う。この場合、この男の子が歩いたり走っていたわけではないから、「立ち止まりたくない」という解釈は生じない。ここでは、「今している遊びをやめたくないでしょ」というほどに解釈できる。つまり、*stop* のあとに、*plyaing in a pile of leaves*…が省略されているという解釈である。そしてこれ以外の解釈はできない。

これが *stop* が目的語なしに用いられている場合の通例の解釈である。つまり、自動詞のようにみえながら、じつは（文脈から目的語がわかるから省略している）他動詞であるということである。したがって、表記の文についても、

(2) *I stopped to smoke.*

この *stop* は「立ち止まる」の意ではなく、「それまでしていたことをやめる」の意であることになる。文脈が与えられていなければ、「たばこを吸うために、それまでしていたことをやめた」と訳するのが精一杯である。

また、(2)の形の文は、次の(3)の文とよく比較される。

(3) *I stopped smoking.*

一般的な説明によると、(2)の文と(3)の文は動詞の種類そのものが異なる（つまり、一方は自動詞で、もう一方は他動詞である）ということらしい。しかし、すでに明らかであるように、どちらの文の *stop* も他動詞である。ちがいがあるのは、「やめる」ことに関わる何があらわされているかという点である。(3)の文は、やめる行為が表されている。(2)の文は、やめる行為はわかっており、むしろ、やめたあとに何をするか（なぜやめるのか）を表している。つまり、どちらの文も次の(4)に示すように、

- (4) a. *stop doing A to do B*
b. *stop doing A _____*
c. *stop _____ to do B*

同じ(a)のような構文の中の、何を明示し、何を明示しないか、の選択が異なっているだけであるということである。

このことについて急いで付け加えておくべきことがある。*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (第7版、2005年)では、この構文についてわざわざ解説を設けている。その解説は以下のとおりである。

(5) Notice the difference between *stop doing something* and *stop to do sth*: *We stopped taking pictures.* means 'We were no longer taking pictures.'; *We stopped to take*

pictures. means 'We stopped what we were doing so that we could start taking pictures.'

解説の主旨は上で述べた内容とほとんど同じである。眼目は stop to do sth の stop を実質的に他動詞と認定した点である。この認定が注目されるのは、この辞典がまだ A. S. Hornby の名を編者として冠していた第3版(1974)の当時は、同じ構文の stop を、十分な意味解釈を添えることなく、自動詞として扱っていたからである。現行の英和辞典もこの点に関する記述に早急な改訂が必要であろう。

なお、富山房の『英和大辞典』がこの構文についてどんな訳を与えているのかも知りたいところである。『英和大辞典』の例文と訳文は次のとおりである。

(6) He never stops to think. (彼は落ち着いて考へるといふことはない)

この場合、それまでしていたことは何であろうか。これからすることが「考えること」であるならば、それまでしていたことは「考えるというのではないこと」であることになる。その「考えるというのではないこと」とは何であろうか。それは「考えるということをしなかったこと」である。つまり、「考えるということをしなかった態度をあらためて、まともに考えるようになる」である。この構文において不定詞の部分に think という動詞が用いられている場合は、通例、「(それまでとはちがって) ~のように考えるようになる」という意となる。

14 都市の名前に形容詞はないと教わったが、それならば映画の Roman Holiday はどうして「ローマの休日」なのか

通例、都市名に形容詞は存在しない。したがって Roman Holiday は「ローマの休日」の意にはならない。ローマが都市名でなく用いられるのは「(古代)ローマ帝国」という国家名のみである。Roman holiday は「古代ローマ人の休日 (の過ごし方)」が原義であり、剣士や奴隷を死ぬまで戦わせてそれを観戦したことから、「人の苦しみのうえに成り立つ快樂」という意の慣用表現となった。イギリスの詩人 George Gordon Byron が *Childe Harold's Pilgrimage* (1812)の中で、gladiator (円形闘技場で観客を楽しませるために死ぬまで戦わされた剣士や奴隷) の死の隠喩として用いたのが最初 (ただし英語圏の人でもこの表現の由来を知らない人が多い)。オードリー・ヘップバーン主演のあの映画は、(もし題名が真に意味を持つものであるならば、) 一般に考えられているのとはちがって、一種の残酷物語として意図されていたことになる。

映画のタイトルは映画配給会社が決める。映画の字幕を担当したプロの翻訳家でも関与

(36)

できない。映画配給会社の社員が Roman holiday の意味を知らずに、「ローマの休日」と誤訳したのか、あるいは「ローマの休日」などという意味がないことを承知の上で、集客効果のあるロマンチックな題名として創作したのか、どちらであるかは定かでない。

ちなみに、この表現に「ローマの休日」という訳をつけている英和辞典があるので要注意。

- 15 (1) Only last Monday the machine was in working order. (先週の月曜日 (まで) は機械の調子が良かった)
- (2) Only last Monday was the machine in working order. (先週の月曜日になってようやく機械の調子が良くなった)

この二つの文がこれほど大きな意味のちがいがあることをどのように教えたらよいか

まず、二つの表題文の解釈についてであるが、問い合わせの文面にある日本語訳で適切である。先週の月曜日を境として、その日まで調子がよかった (その後は調子が悪くなった) か、(それまで調子が悪かったのが) その日になってから調子がよくなったか、のちがいがよく出ている。

この二つの文のちがいを求めてみると、表面的には、主語・助動詞倒置が生じているか否かの一点だけであるようにみえる。が、形式のことを論ずる前に、もう少しこの二つの文の意味解釈のちがいについて考えてみることにしよう。

そのために、類似の例をいくつか挙げてみることにする。

- (3) a. With no job, John would be happy
(仕事がなければジョンは幸せだろうに)
- b. With no job would John be happy.
(どんな仕事にもジョンは満足しないだろう / ジョンが満足できるような仕事はないだろう)
- (4) a. (Even) with no coaching he will pass the exam.
(指導を受けなくても彼なら合格する)
- b. With no coaching will he pass the exam.
(どんな指導を受けても彼は受かりはしない) [Whatever coaching is provided will not enable him to pass the exam.]
- (5) a. Only on Mars he can truly appreciate the beauty of his own world.
(火星にいるときだけ彼 [主人公の宇宙飛行士] は地球の美しさが理解できる)
- b. Only on Mars can he truly appreciate the beauty of his own world.
(火星に来てはじめて彼は地球の美しさがわかるようになる)

それぞれの例文に添えた日本語訳を手がかりに、二つの構文の差異を書き出してみると、概略、次のようになる。

(6) a. 非倒置型の文(1)の特徴

- (i) 文頭の副詞表現に否定的な要素が含まれていても、その否定の作用域は副詞表現の内部に限定される。その点で、否定は局所限定的である。
- (ii) 文全体としては肯定文である。
- (iii) 文頭の副詞表現は既知の「話題」である。「～である（ない）ならば」「～である（ない）場合は」というほどの意となる。
- (iv) 文全体の情報構造は、文頭の副詞表現をAとし、後続する命題をBとすると、
[_A 旧情報][_B 新情報]という構成である。
- (v) 文全体としてあるものごとの一時的な状態を表す。

b. 倒置型の文(2)の特徴

- (i) 文頭の副詞表現に否定的な要素が含まれている場合、その否定の作用域は文全体に及ぶ。
- (ii) 文全体としては否定文である。
- (iii) 文頭の副詞表現Aは、後続する命題Bが成り立つための条件である。このとき、後続する命題Bの内容が既知であり、「Bであることを成り立たせる条件に何があるか」というと、・・・というほどの意となる。その条件が否定内容である場合は、「Bであることを成り立たせる条件はない」となる。Aに only のような唯一性を表す表現が含まれている場合は、「Aが成り立ってはじめてBが成り立つ」となる。
- (iv) 文全体の情報構造は(1)の文とちがって、[_A 新情報][_B 旧情報]という構成である。
- (v) 文全体としてあるものごとの恒久的な性質を表す。

なお、主語・助動詞の倒置が起こる要因についてであるが、主語より前に旧情報を担う要素が置かれた場合は、主語・助動詞の倒置は起こらない。それにたいして、主語より前に新情報を担う要素（あるいは新情報を求める要素）が置かれた場合は、主語・助動詞の倒置が起こる。

(7) a. Who do you love? (倒置あり。文頭の who は新情報を求めている)

b. This book I read. (倒置なし。this book は旧情報)

c. I was wondering whether John would leave, and leave he did. (倒置なし。leave は旧情報)

d(=3a). With no job, John would be happy. (倒置なし。with no job は旧情報)

(38)

e(=3b). With no job would John be happy. (倒置あり。with no jobは新情報)

16 I do love you. という文は何を強調しているか

まず、次の文において強調される箇所を少しずつ変えてみることにしよう。斜字体の部分が強調される要素である。

- (1) a. *I* love you. (あなたのことが好きなのは、この私です)
- b. I love *you*. (私が好きなのは、あなたです)
- c. I *love* you. (私があなたに抱いている感情は、愛です)
- d. I *do* love you. (嘘ではありません。あなたのことが好きです)

(1a-c)の文の解釈は、強調される部分を文末に抜き出した形の日本語で表すことができるので、わかりやすいであろう。問題は、(1d)である。これを一つの日本語で訳すことは容易ではないように思われる。それは他の文に比べて文脈への依存度がずっと大きいからである。(1d)のような文が用いられる典型的な文脈を挙げてみることにしよう。

- (2) A: You don' t love me any more. (わたしのこともう好きじゃないのね)
- B: I do love you. (そんなことないよ、好きだよ)

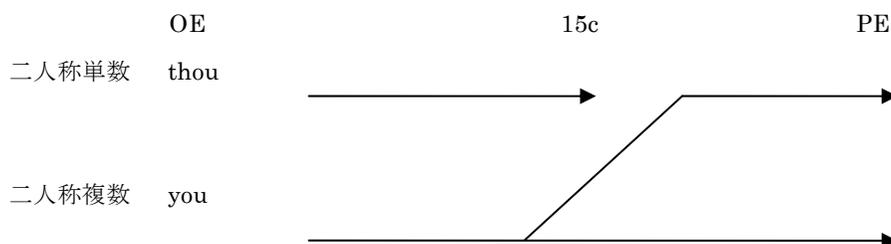
- (3) A: Give me a penny, Papa! (お父さん、10円ちょうだい)
- B: I have nothing for you. (お前にやるお金などない)
- A: Do give me just one penny! (10円でいいからちょうだいよお)

- (4) I believe he really did make that mistake. (ああは言っているが、本当はその失敗をやらかしたんだと思うよ)

いずれの文脈にも共通しているのは、doを伴う文に先だって、それに対応する否定文があることである。つまり、このdoは、否定を打ち消すために肯定を強調しているのである。「肯定の強調」が本意であるから、これ以外の部分を強く読むではない。I do love you. という文において強く読むのはdoだけである。それ以外の要素は (love など動詞も含めて) 強く読むではない。

17 相手が一人でも you are…と動詞が複数形になるのはなぜか

英語における二人称代名詞は、もともと単数形と複数形の二つがあった。単数形は *thou*、複数形は *you* である。それが、以下の図に示すように、おおよそ 15 世紀ごろから複数形の *you* が単数形としても用いられるようになり、現在では *you* が二人称をほぼ独占するに至っている。



you が二人称単数に用いられているときでも動詞が複数形に対応するのは、もともとの複数形を引きずっていることに起因するのである。

もともと、二人称単数形の *thou* は、一般的な用法では目下の者あるいは親しい者への呼びかけに用いられた。現在でも多くの方言で親が子供に呼びかけるときに用いられている。それにたいして、*you* は、目上の者あるいは同等の者への呼びかけに用いられていた。単数用法を獲得して以降は上下の区別なく用いられるようになった。

18 I have something to do. のときの have の -ve の発音は [v] であるのに、どうして I have to do something. のときは [f] になるのか

同化 (assimilation) の一例。直後の無声閉鎖音の影響で有声音が無声化して慣用化したものである。

- (1) have to
 has to
 had to
 used to
 of course

ただし、以下のような場合は無声化は起こらない。

(40)

(2) a. 直後に無声閉鎖音が続いている場合

You have [hæv] something to do.

b. 直後に無声閉鎖音があっても、間に節の境界がある場合

I' ll spend all I have [hæv] to win the election.

なお、have {only/just/yet} to の場合は、have to がまとまりをなした上で（つまり [hæf/hæs/hæt] の発音が決まったあとで）、only/just/yet が挿入されたと考えるのがよいと思われる。めったにない例であるが、only/just/yet 以外の副詞が挿入された場合は、[hæv][hæz]となる。

(3) Each such person has [hæz] until December 31 to make his application.

19 なぜ something は形容詞がうしろにつくのか

前位修飾は本来的、恒久的な性質を表す。後位修飾は一時的、非確定的、偶然的な状態を表す。次の各対表現を見てみることにしよう。

(1) a. sick people

b. people sick

(2) a. a used car

b. a car used

(1a)は「病弱な人たち」の意。(1b)は「気分が悪い人たち」「乗り物酔いをしている人たち」の意。(2a)は「中古車」の意。(2b)は「(あるとき、あるところで、だれかに)使われた車」の意。このうち(2a)が「中古車」の意になるのは、「人に使われた」ことがその車の特徴になってしまったからである。

修飾が前位か後位かに関して、修飾表現の長さをその決定要因とする考えがある。修飾表現が長いときは名詞の後に置くということであるらしい。たしかにその傾向はある。しかし、長さが問題であるのではない。修飾表現が長いというのは、「いつ、どこで、だれに、どのように」といった情報が増えるということであり、それはとりもなおさず、内容の特定化を引き起こすからである。それだけ、特定の時に、特定の場所で、特定のだれかが、特定の仕方で、なにかをしたという、一時的な性質を表す意味が強く出てくるのである。

(1)のように形容詞を名詞のうしろに置くことができるという事実は、必ずしもよく理解されていないようである。それは、たとえば次の(3)のように、前位修飾は可能だが、後位修飾は可能でない例が多いからである。

- (3) a. a tall man
b. *a man tall

なぜ、(3b)が容認されないかという、背の高さはその人の持つて生まれた資質だと考えられるからである。日常生活で背の高さが可変することはないであろう。つまり、(3b)は、英語として容認されないというよりは、むしろ、この表現の表す事態が身近な現実の世界において容易には考えにくいからである。

なお、修飾要素が現在分詞である場合に注意を要することが二点ある。次の(4)の例を試みることにしよう。

- (4) a. a barking dog
b. a dog barking

(4a)は「吠え癖のついている犬」の意(恒常的状态)と、「吠えている犬」の意(一時的状態)の二つがある。(4b)は「吠えている犬」という一時的状態の解釈のみである。そうすると、現在分詞の場合は、置かれる位置に関係なく一時的状態の解釈ができることになる。(4a)の場合、恒常的状态の意になるか一時的状態の意になるかは文脈を見なければわからないということである。

(4)のような例に関してもう一つ注意を要することがある。それは、一時的状態を表す場合の時制である。「吠えている」という解釈が可能であっても、その吠えているのがいつのことであるかが、このままではわからないのである。とくに後位修飾の場合にそれがはなはだしい。(4b)は次の(5)に示すように時概念を自由に設定することができるのである。

- (5) a. a dog barking now
b. a dog barking yesterday
c. a dog barking when I entered the house

この指摘がどういう意義をもつかというと、後位修飾を関係詞節の縮約形と考えてはいけないということなのである。次の(6)のようなパラフレーズの仕方は正しいとは言えない。

- (6) a dog barking < a dog that is barking

そもそも時制を削除するということが自体が無謀なことであるが、仮に初学者にとってわかりやすいことを優先させたとしても、a dog barking という表現からは現在時制は一律的には出てこないのである。いつでもそうであるが、「パラフレーズ」を持ち出すときはよほどの注意が必要である。

そこで表題の問いである。なぜ something は形容詞がうしろにつくのか。答えは、

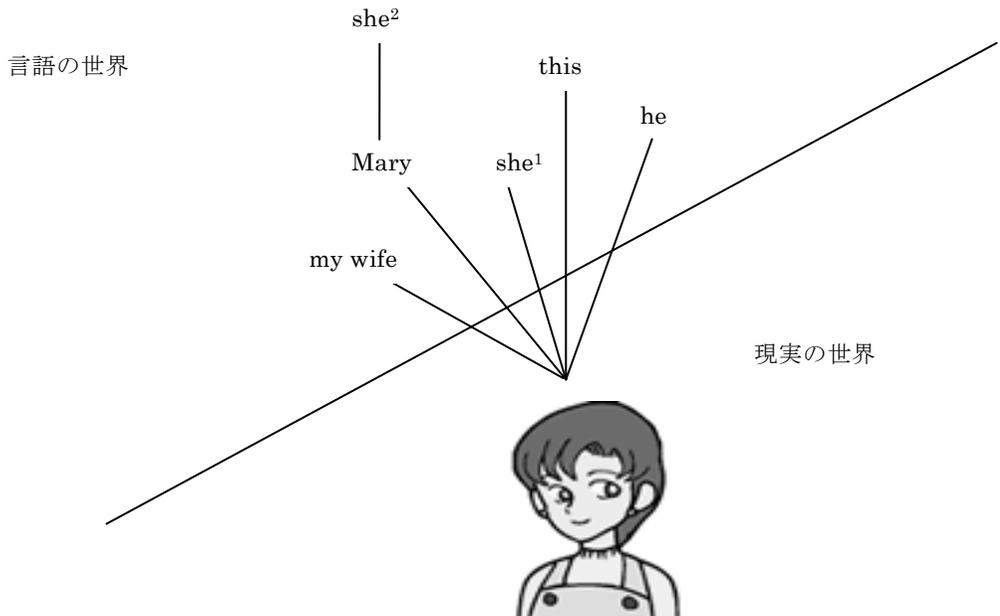
(42)

something/anything が具体的な中身を確定せずに用いる表現だからである。具体的な中身が確定できていない以上、それへの評言も恒常的、本来的な性質として位置づけることはできないのである。

20 May I speak to Mary? (メアリーさん、いらっしゃいますか) という問い合わせにたいして This is she. (はい、私です) などと答えるが、どうして自分のことを三人称の代名詞で表すのか

これは、言語表現と現実の世界の対応関係という、意味論の核心部分に触れる疑問である。いま、現実世界にある人物がいるとする。その人物に言及しようとする場合、その人物のどの側面に言及するかによって言語表現が変わってくる。それを次の(1)の図で見ることしよう。

(1)



いま問題となる人物を女性としよう。その女性を、話し手との社会的関係を抜きにして、Mary とファースト・ネームで呼ぶこともできる。あるいは話し手との家族関係の側面に言及して my wife と表現することもできる。もちろん、家族関係が異なれば、my mother/Mother,

my daughter, my grandmother, John's wife, Tom's mother など、さまざまに表現できる。a woman sitting next to me on the train のような表現でもよい。また、女性としての側面のみに言及して she と表現することもできる。さらに、その女性の男性的な側面に言及して he と表現することすら可能である場合もある。重要なことは、そのいずれであっても、同じ現実世界の人物を指しているという点である。

たとえば次の(2)のような文における Mary と she について考えてみることにしよう。

(2) I saw Mary yesterday. She was walking her dog.

この場合、Mary が指す人物と she が指す人物は同じである。ところが、この Mary と she の関係を、「she は Mary を指す」とか「she の先行詞は Mary である」というような言い方で表す向きもある。このような捉え方は、正しくない。正しくは、Mary という表現と she という表現がそれぞれに指している人物が同じであるということである。Mary という言語表現と she という言語表現との間に直接的な関係があるわけではない。(1)の図でいえば、線で結ばれているのは Mary と現実世界の人物であり、she¹ と現実世界の人物である。Mary という言語表現と she¹ という言語表現は、それぞれが指している現実世界の人物が同じであるという点で、間接的に結びついているにすぎないのである。

また、「先行詞」は言語表現に求められると誤解している向きも多い。次の(2)の文を考えてみることにしよう。

(3) John opened the door and Mary closed it.

「この文における代名詞 it の先行詞は何か、文中の一語で答えよ」というような問題をよく目にする。「一語」という以上、解答として想定されているのは door であるらしい。しかし、単数形の可算名詞を冠詞なしで用いることは、一定の場合を除いて、英語では許されない。*Mary closed door. などという英文はないのである。

それならば it の先行詞は the door であると答えたとしよう。それは正解であろうか。結論を言えば、これも正しくない。そもそも the door 「そのドア」とはどのドアであるのか。先行文の the door と同じものであるのか。それならば誤答である。なぜならば、先行文における the door は「閉まっていたドア」であり、後続文において it で指し示されているドアは、ジョンが開けて、そのままになっていたドア（つまり「開いていたドア」）であるからである。it の先行詞が先行文の the door であるとするのが正しくないとするゆえんである。正しくは、the door that John opened としなければならない。要するに、言語表現同士が、直接、照応関係にあるのではないということである。結びつくのは、言語表現と現実世界の事物である。

ところが、言語表現自体と結びつく表現もある。それが(1)における she² である。この表現は Mary という言語表現自体を受けているものであり、現実の人物とは結びついていな

(44)

い。現実世界の人物を指しているのは Mary という言語表現であり、その Mary という言語表現を指しているのが she² という言語表現である。

次の(4)の文を考えてみることにしよう。

(4) Even Acid Eddie' s mother calls him that.

この場合、that は、Acid Eddie という名で呼ばれる現実世界の人物を受けているのではなく、Acid Eddie という名前（言語表現）を受けている。Acid Eddie は acidhead (LSD 常用者) を思い起こさせる奇妙な名前である。that がこの名前自体を指していることは、聞き手が次の(5)のように聞き返すことができることからわかる。

(5) What? Spell it for me. (何とですって。どう綴るのですか)

このような代名詞表現が、いま問題にしようとしている she² である。そこで表題の文である。

(5) May I speak to Mary?

-This is she.

「メアリーさん、いらっしゃいますか」「メアリーは私ですが」というやりとりである。この場合、応答者が用いている 'she' は、相手が用いた 'Mary' という表現それ自体を受けている代名詞である。注意すべきは、この場合、Mary という名前の「人物」を受けているのではないという点である。あくまで受けているのは言語表現であり、人ではない。人の部分は this が受けている。この this は現実世界の話し手自身を指し示している (図(1)を参照)。

21 any が否定文で用いられた場合、単数名詞を伴っている場合と複数名詞を伴っている場合にどのような意味のちがいがあるか

まず any の意味を明確にしておこう。そのためには some と比較するのがよいと思われる。some と any の本質的なちがいは次の(1)に示すようなものである。

- (1) some: 数量あるいは質に関して話し手が一定の基準を設定し、当該の事物がその基準を上回っていると話し手が判断していることを表す。
any: 数量あるいは質に関して話し手は一切の基準を設定していないこと

を表す。

具体的な例で見てみることにしよう。まず some の例から。

- (2) Do you have some money?
- a. Yes, I do.
 - b. No, I do not have some money.
 - c. No, I do not have any money.

(2)の問いは、話し手が求めている金額について一定の基準を設定していることを表している。つまり、「こちらが要求するだけの金額をお持ちですか」の意である。「いくらか」というようなあやふやな意味ではない。これにたいして(1a)のように答えたとすると、「あなたの求めている金額を持っている」の意となる。それにたいして(1b)のように否定で答えた場合は、「あなたの求めている金額は持っていない」の意である。この場合、注意しなければならないのは、お金は持っているという点である。否定は some に向けられており、「(お金はあるが) あなたが求めている金額はない」と言っているのである。(1c)のように any を用いて答えた場合は、金額に基準がないものとして用いられているから、1円でも、100円でも、1万円でも、どの金額をとっても、持っていない、つまり「一銭も持っていない」の意となる。

このような some の意味は次の(3)のような例でいっそう明らかになる。

- (3) a. It took some effort to finish it.
b. She said, "I was somebody in this town."

(3a)の文は、それを完成させるには「相当の努力が必要でした」の意である。some effort を「ある程度の」などと解釈してはならない。ちょっとやそっとがんばってもできることではありませんよというのである。この some の意味が突出した形で現れているのが(3b)のような例である。「これでも昔はこの町で顔が利いたのよ」というほどの意である。人の中身に関して一定の基準を上回っているというのであるから、「大物」というような意となる。

次に any を用いた問いについて考えてみることにしよう。

- (4) Do you have any money?
- a. Yes, I do.
 - b. No, I do not have any money.
 - c. *No, I do not have some money.

(46)

まず、問い自体に any が用いられているから、話し手は金額について一切の基準を考えていないことを示している。「いくらでもいいからお金を持っているか」という意である。1円でも持っていれば(4a)のように肯定で答えることができる。(4b)のように not…any の組み合わせで答えた場合は、「どんな金額を想定しても、その金額を持っていない」であるから、「一銭も持っていない」となる。

一方、any を用いた疑問文に(4c)のように some を用いて答えることはできない。「いくらでもいいからお金があるか」という問いにたいして、「あなたが求めている金額はない」ではつじつまが合わないのである。some にたいして not…any とは答えられるが、any にたいして not…some と答えることはできないのである。

そこで表題の問いである。any が否定文で用いられた場合、単数名詞を伴っている場合と複数名詞を伴っている場合にどのような意味のちがいがあるか。次の(5)の例で考えてみることにしよう。

- (5) a. There are not any cars in the parking area.
b. There is not any car in the parking area.

(5a)は any が複数名詞とともに用いられている例である。any が複数名詞で用いられているということは「数」「台数」に関して基準がないということであるから、その否定形は、「1台でも、10台でも、100台でも、どの台数をとっても、車はない」つまり「駐車場には一台の車もない」となる。それにたいして(5b)の場合は any が単数名詞とともに用いられているから、車の「質」に関して基準が設けられていないことを表している。「きれいな車、汚れている車、高そうな車、安そうな車、走りそうな車、どうにもならない車、そのどれも、ない」であるから、「駐車場には車というものがない」の意となる。

22 なぜ摂氏0度は zero degrees Celsius と複数形で表されるのか

英語の単位表現は、ある数を分数で表した場合、分母か分子のどちらかにでも1以外の数字があれば複数形をとる。つまり、1/1以外の分数はすべて複数扱いになる。次の諸例を参照。

1 = 1/1	one meter/centimeter/millimeter/gram/kilogram/...
2 = 2/1	two meters/centimeters/millimeters/grams/kilograms/...
1.1 = 1.1/1	1.1 meters/centimeters/millimeters/grams/kilograms/...
0.1 = 1/10	0.1 meters/centimeters/millimeters/grams/kilograms/...
0.01 = 1/100	0.01 meters/centimeters/millimeters/grams/kilograms/...

温度の0度は「温度がない」の意ではない。その0度をどのような分数で表わすのかわからないが、少なくとも1/1ではない。1/1は1度である。1/1ではない他の分数であるがゆえに、複数扱いになるのであると思われる。

ちなみに、本物のゼロは分子にゼロがくる0/1であるから（分母はなんでもよい）、理屈の上では複数扱いになるはずである。実際、そのとおりで、長さがない、重さがないというような意味でゼロセンチ、ゼログラムという場合、単位はすべて複数形になる。

0 = 0/1 zero meters/centimeters/millimeters/grams/kilograms/...

なお、percent という単位だけはどんな数字が来ても単数形のままである。理由はわからない。

23 再帰代名詞は [所有格形+self] (myself, yourself, ourselves, yourselves) のものと、[目的格形+self] (himself, themselves) のものがあるが、どうしてこのような違いがあるのか

これも、生徒にはじめて再帰代名詞を教えるときに、必ずといってよいほど教員が疑問に思う問題である。教わる生徒も、おそらく同じ心境であることだろう。このことに関する定説は、ない。そこで有力な説の一つを紹介することにする。まず(1)の表を見てみることにしよう。これは再帰代名詞の変遷をまとめたものである。

(1) 再帰代名詞の変遷

二語	複合語化	単数複数分化	所有格化
me self	→ meself	→	myself (13c)
you self	→ yourself	→	yourself (14c)
us self	→ usself	→ usselves	→ ourselves (16c)
you self	→ yourself	→ yourselves	→ yourselves (16c)
him self	→ himself	→	→
her self	→ herself	→	→
them self	→ themself	→ themselves	→
it self	→ itself	→	→

再帰代名詞は、もともと、目的格代名詞と self という語が隣り合った形で用いられたのが始まりである。最初は二語のままであった。それが複合化して、一語になった。やがて self が名詞として感じられてきたらしく、複数代名詞と組み合わせる self は selves とな

(48)

った。この時点まではすべての再帰代名詞は [目的格形+self] の形であった。

ところが、単数複数の分化が生じてのち、一部の再帰代名詞に主要部の組み替えが起こったらしい。もともと再帰代名詞は代名詞に self が付くという関係であり、中心は代名詞の方にあった。それが、herself のように目的格と所有格が同形の代名詞と組み合わさった再帰代名詞の場合、her という目的格形に self が付くというのではなく、self に her という所有格形が付いていると感じられてきたらしい。つまり中心が代名詞から self の方に移ったのである。

これに真っ先に呼応したのが meself である。me [mi] は my の弱形 [mi] と同じ発音である。この弱形の発音は my lord [milo:d] や because < by+cause などに残っている。[miself] と発音されていた再帰代名詞が、herself に触発されてか、統語上の中心を self の方に移した場合、それが meself から myself という綴り字の変化に反映するのも自然なことであつたろう。これが 13 世紀のことである。その後、yourself (14c)、ourselves (16c)、yourselves (16c) が現れた。

現在、所有格形の代名詞と組み合わさっているのは、herself を除けば、一人称と二人称の再帰代名詞だけである。三人称の himself/themselves/itself がどうして統語構造の組み替えを起こしていないのかは、わからない。

24 laugh, cough, tough の gh はどうして [f] と発音するのか

現在、gh という綴り字を含んでいる語は、当初は h だけが用いられており、[x] と発音されていた。それがフランス語に合わせて綴られるようになり、gh となった。その後、15 世紀ごろに [x] → [f] の音変化が起こった。現在、laugh, cough, tough の gh を [f] と発音するのは、このためである。

それならば、bought, thought, though, right の gh はなぜ [f] の音にはならないのかという疑問も起きよう。もちろん、これらの語の gh も [x] (位置によっては [ç]) と発音され、17 世紀までは [f] と発音されていた。それが、18 世紀ごろに、直前に長母音か二重母音がある gh は発音されなくなったのである。laugh/cough/tough のような語の場合は母音は短母音であるが、bought/thought/though/right のような語の場合は長母音か二重母音である。gh を発音すること、あるいは発音しないことが、直前の母音の発音のちがいと対応するようになったのである。

以下に、該当する語の一部を列挙しておこう。

(1) gh の発音の変遷

	15c	18c	
	[x]	[f]	φ
cough	x	f	
draught	x	f	
enough	x	f	
laugh	x	f	
rough	x	f	
tough	x	f	
bought	x	f	φ
caught	x	f	φ
daughter	x	f	φ
eight	x	f	φ
fraught	x	f	φ
high	x	f	φ
night	x	f	φ
plough	x	f	φ
light	x	f	φ
right	x	f	φ
taught	x	f	φ
though	x	f	φ
thought	x	f	φ

なお、delight の gh は light をまねして創作されたもので、gh とは無関係である。もとの綴り字は delit である。

ところで、「読まれない綴り字」はどうして消えないのかという疑問もあろう。たしかに物理的な音としては表出されないが、じつは、脳の中では「読まれている」らしいのである。次の(2)に挙げる対語を見てみることにしよう。

(2) questt - question

Christt - Christian

rightt - righteous

下線を引いた t の発音に注意してほしい。左の列の語の t はすべて [t] である。右の列の語の t はすべて [tʃ] である。一方は閉鎖音であり、もう一方は破擦音である。/t/ → [tʃ] の破擦音化は、通例、以下の環境で生ずるものである。

(50)

(3) 母音（強勢あり）－摩擦音－[t]－母音（無強勢）

↓
[tʃ]

ここで「摩擦音」とあるのは、quest(ion)や Christ(ian)などの語にあつては、t の前の s である。この s は発音されている。ところが right(eous)の場合は、発音だけを見ると [rait] であるから摩擦音は存在していない。それにもかかわらず t が破擦音化しているのである。

これは綴り字の中に残っている gh が脳の中で「読まれている」と考えるとうまく説明がつく。gh は摩擦音を表す字母だからである。つまり、gh は、音としては読まれないけれども、「そこにある」ことによって、実際に読まれる破擦音と同じ機能を果たしているのである。一見、そうは見えないが、英語の綴り字はじつに規則的であるということである。

なお、Christianity という語の発音についても触れておくべきであろう。(3) の条件を当てはめると、-isti- の t が破擦音化しそうであるが、母音の強勢の位置が (3) の条件に合わないために、/t/ のままとなる。Christian と Christianity の発音には十分注意する必要がある。

25 double の b はなぜ黙字の b ではないのか

doubt の b と比べているのであると思われるが、これは、フランス語からの借用語のうち、はじめから b があつたものと、あとからラテン語に似せて b を入れたもののちがいである。doubt と double の本来のフランス語は (1) に示すとおりである。

(1) double < doble (フランス語に b あり)

doubt < douter (フランス語に b なし)

douter については、フランス語でもルネサンス期から b を入れて doubter と綴ることも多かったので、英語はこれをまねたのかもしれない。フランス語からの借用語の一部に b が入るようになったのは 16 世紀あたりからのことである。

ただし、黙字の b といっても、「もともと b があつたが、読まれなくなったもの」と「もともと音としてないところに b を入れたもの」の二種類のものがある。以下に、黙字の b の例のうち、途中から /b/ の音が消えたものと、途中から文字だけ入ったものの例を挙げる。

(2) 黙字の b の例

bomb,	climb,	tomb,	comb,	lamb,	num,	det,	dout,	sutle,	thum,	lim
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
φ	φ	φ	φ	φ	b	b	b	b	b	b
↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓
bomb,	climb,	tomb,	comb,	lamb,	numb,	debt,	doubt,	subtle,	thumb,	limb